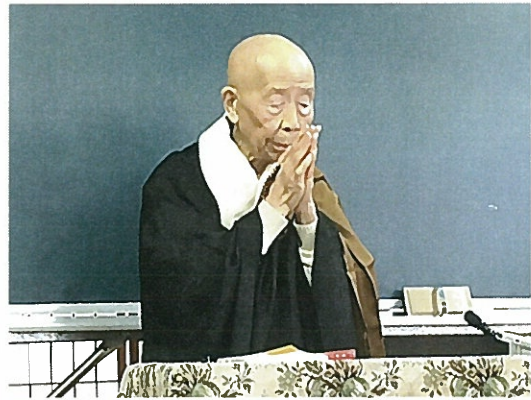


平成28年12月17日（土）の「仏教女性の集い」

各地で「終い行事」の行われている師走の京都、仏教女性の集いも今年最後の回を迎えました。今回は、仏教聖典副読本「さとの知恵を読む」117頁～より『ブッダの生涯』を題材にご講話をいただきました。近藤先生は、「現代では、人生の問題について深く考えることが希薄になっているのではないか。」と問題提起をされた上で、お釈迦様の人生に沿うように、若き日の久松真一先生の若者らしい苦悩や尼僧の存在を認めない国の女性が尼僧を志したことなど、先生自身が見聞きしたエピソードを取り混ぜながらお話くださったので、お釈迦様の生涯もまた一人の人間の人生のように感じ、いつの間にか自分の人生にも重ねてテキストを拝読していきました。



お釈迦様の生涯に学んだことは苦しみを苦しみ、悲しみを悲しむところからすべては始まるということです。では、生老病死はなぜ苦しみなのでしょうか。それは自分の意思では何一つ決められないことだからと知ります。まず、その時代、環境に生まれることからして、お釈迦様ですら自分で選ぶことはできないことでした。そしてどのような環境であろうが生まれた以上は必ず、ままたらない苦しみから逃れることはできません。生まれたことが最大の苦と言えます。お釈迦様の苦しみは万人の苦しみでもあります。ただし、そのどうにもならない事実の中で、それをどのように受け止め、いかに行動していくかということは自分で決められることとお釈迦様は教えます。お釈迦様は出家され、時には誤った道を経験し（苦行）、ご自身の弱い心と闘い（降魔）、とうとうお悟りを開かれました。

「体は金色の光を放った。」と書かれるテキストの前で、同じように歩めない私自身は途方にくれます。その私のような一般人が歩む道を案じて誓願を立ててくださったのが法蔵菩薩でした。苦しみを苦しみと気づいたものの一歩も動けないでいる者を、一人でも取りこぼすことは阿弥陀様には耐えられないことにちがひありません。「私の名を呼ぶことくらいは、できるでしょうか？」という仏の叫びが心に響きます。自分の悟りで金色にはなれそうにありませんが、仏の光にこの身を照らしていただくことはできるのです。では、念仏をどう申すか。一紙小消息にある法然上人の言葉です。

「うけがたき人身をうけて、あいがたき本願にあいて、発しがたき道心を発して、はなれがたき輪廻の里をはなれて、うまれがたき浄土に往生せん事、悦びの中の悦びなり」。お釈迦様同様に人間の苦しみを知り尽くしたはずの法然上人は、その上でなお、人間として生まれたことを感謝していらっしゃる。私たちの道である、阿弥陀様の本願に出会ったことを悦んでいらっしゃる。究極の感謝の念です。お悟りを得たお釈迦様の初めての説法（初転法輪）は、歴史的な大事件です。彼が口を開かなかったら、現代に仏教は存在しません。法然上人の生きようも違うものになったでしょうし、南無阿弥陀仏とつたないながら申す私も存在しません。

今回の茶話会では、他宗の尼僧様の初参加、米国から勉強にきている研究者の旅立ちと、ゆく人来る人囲んでの賑やかな会となりました。お孫さんに仏様のことをどう教えたらよいかという話題があり、女性は生み出す性、育てる性であり、「おばあちゃん」「おかあさん」、女性が宗教において担う役目は大きいと気づきました。

片付けを終えて教室からでましたら、先に玄関でお待ちくださっていた会友のお一人が「今、夕日がきれいやったよ。」とつぶやかれました。外にでましたら、遠い西の空が赤く染まっていました。言葉を重ねることはなかったけれど、そこに西方浄土へのあこがれを感じていたことはお互いに明白なことです。帰路につく銘々が空を見上げたことでしょう。同じ景色を見ることが出来る人々と集うこの場所をかけがえなく思います。

- ・旧尼僧道場敷地内に静かにたたずんでいらっしゃるお地蔵様。私たちの学びを見守ってくださる暖かな眼差しがここにもあることによりやく気づかせていただきました。



今月のお菓子は「初霜」

(参加者感想 M. O)

次回の「仏教女性の集い」は平成29年1月21日です。

一年の始まりです。サプライズな企画を計画しております。
どうぞご参加お待ちしております。

「仏教女性の集い」は毎月第3土曜日、午後1時～4時
参加費 1,000円 宗教・宗派は問いません。
条件は女性であることだけです。
多数のご参加お待ちしております。
市バス[知恩院前]下車、東へ150m
『吉水尼僧庵』(旧尼僧道場)で開催致しております。
問い合わせは 隆彦院 075-561-7581 まで



「仏教女性の集い」の様子は浄土宗吉水会のホームページに掲載しております。